

並木栗水の思想（Ⅰ）：『朱陸太極問答合編』の位相

望月，高明
都城工業高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/1786939>

出版情報：中国哲学論集. 41, pp.65-85, 2015-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

並木栗水の思想（Ⅰ）

『朱陸太極問答合編』の位相

望 月 高 明

—

小論の表題を「並木栗水の思想」としたのであるが、一口にそのように言っても、その思想の体質を一義的に規定することは甚だ困難なように思われる。わけても並木栗水（一八二八—一九一四）の思想家としての生涯に徴したとき、その前期（ひとまず朱子学時代と称する）と後期（同じく朱子学修正時代と称する）とにおいて、その思想に何らかの顕著な断層が認められるような場合には一層そういうことが妥当する。彼は弱冠以来、大橋訥庵（一八一六—一八六二）の許で厳密に資料に即いて朱子学の精神、並びにその基本的範疇の究明に従事して、その学を聖学の真伝とまで篤く信じて、事実著述等を介して忠実に祖述してきた。しかるに、多年にわたる『周易』への沈潜は、栗水をして漸を追うて朱子の教説に対する「大疑」を醸成せしめ、かくして実に齡七十を越えて自己の学説に大幅な修正を加え、朱子学離れを演ずるに至った。かく見來たれば、「並木栗水の思想」と言っても、その転換点を境にしてそれ以前と以後とにおいては大きな断層が横たわっているとしなければならぬ。また、然く「並木栗水の思想」と言ったとき、それが一義的に彼の思想の最後の結晶、あるいは思想体系（栗水の学問においてそういうものが認められ

るか、もしくは再構成が可能であるとして）としての最後のな完成形態を意味するものであるとするならば、それ以前前の立場というのは精々最後のな結晶、あるいは最後のな完成形態を準備した中途的なものに止どまるか、あるいは最後のな立場から顧みたととき、自己の既往に棄揚包摂し来たつたものとして、それに到達するまでの過渡的な諸段階としての意味しか担わないことにならう。しかし、小論は栗水の思想をその最後のな結晶、完成形態において叙述することを目的とするものではない。小論の主題は極めて限定的なものにすぎない。彼がいまだ朱子学に対して大疑を抱く以前の「純然タル朱子学ノ徒」（楠本碩水の語）としての自覚に立っていた時期の述作を取り来たつて、その起伏を論じようとするにすぎない。（もつとも、栗水は晩年に自説に修正を加えた後も、主観的には自己が朱子学者であることを疑つたことなど毫もない）。その述作とは『朱陸太極問答合編』（一卷）、これである。なお、同書は刊本ではなく写本である。右の書はその表題からも容易に予想せられるごとく、宋儒周濂溪の『太極図説』劈頭の「無極而太極」の五字をめぐつて朱子と陸子兄弟（兄の陸梭山と弟の陸象山）との間に催起した論争の起伏を弁証することを直接企図したものである。『朱陸太極問答合編』の成立は、その序文の年次によると明治十八年五月である。時に栗水は五十七歳。

ところで、『朱陸太極問答合編』が然く明治十八年に成つたということは、必然的にわれわれを次の問いへと導かないであらうか。すなわち、古来論じ尽くされた感のある存在と根柢の問題が、明治時代という、江戸時代産のすべての学派が学派としての筋道立つた秩序性を完全に失つて最終的に断片的スクラップと化し終わった正しくこの今において、改めて問題とせられているのはいかなる事態を含蓄しているのかという問い、これである。試みにこの問いに答えるに、朱陸の無極太極論争が栗水の注意を惹いたのは、彼が朱子学者であつたからに他ならないという文言をもつてしてみよう。その言辞が右の問題に対して本質的には何も答えていないのに等しいことは改めて述べるまでもない。朱陸の論争は既往に催起した、その意味においては歴史的な一つの出来事として既済の過去の刻印を帯びている。しかし、その深い問題の根源は優れて今日的な問題として、依然その有意味性を失っていないことをそれは証ししていないだらうか。それはこの問題が過去の死んだスコラの論議としてではなく、喫緊な現在のな課題と結びつ

いて尖鋭的な形で現れていることを示唆している。そして、このことの究明は明治時代において朱子学者であるとは、畢竟どういうことであるかという新たな問題の究明へとわれわれを導くであろう。

後述するごとく、『朱陸太極問答合編』はその成立の事情からいって極めて論争的ホレミックな性格を色濃く帯びている。すなわち、明治十八年に同書が著されるとその講友たち、崎門学派の朱子学者楠本碩水（一八三三—一九一六）、及び吉村秋陽の高弟の陽明学者東沢瀉（一八三二—一八九一）が応答して、三者の間で書簡を介して朱子学と陸王学の性格規定、評価、あるいはその基本的範疇の定義をめぐって論争が繰り広げられた。そして、その論争は明治時代におけるわが国の宋明学のレヴェルを卜する試金石としての地歩を占めているとともに、文字通りその論争は日本儒学史における掉尾を飾る偉観といつても過言ではない。

もっとも、上来指摘したことは『朱陸太極問答合編』が成立した後に生起した事象であつて、その限りにおいてはその思想の流通範囲をめぐる問題に属するといつてよい。（なお、かかる象面については小論と姉妹の編をなす「並木栗水の思想——『朱陸太極問答合編』の起伏——」なる論文を準備して主題的に論ずる予定である）。このことの究明が思想的にどれほど重要な価値を有しているとしても、飽くまでその後が生起した出来事として、論理的にいってこのことの考察に先立つて、『朱陸太極問答合編』それ自体が検討せられなければならない。

初めに『朱陸太極問答合編』の構成について述べる。同書は「朱陸太極問答合編序」（以下、合編序と略称する）、『朱陸太極問答』二「後叙」の三部から構成せられている。因みに「合編序」は九七七字、「後叙」は二六六四字から成つていてともに長文であるが、後者はとりわけそういう観がある。そして、かかる事実は判然と何事かを語るものではなくてはならない。ここですぐ上で『朱陸太極問答合編』がその成立の由来からいって極めて論争的ホレミックな性格を色濃く漂わせていると指摘したことを想起しよう。事実、かかる傾向の一斑は「合編序」の次の文に徴しても容易に観取し得るのである。

故に朱陸の異を弁せんと欲する者は、必ず当に道の本源極処に於いて之を求め、而して又た講学の得失を以て之を参じ、熟察して明判すべし。則ち其の孰れか是非、孰れか得孰れか失、孰れか醇にして正、孰れか駁にして邪、

一々呈露して、相拵わず。

右の文において注意すべきは、栗水において朱子の思想と象山のそれとの理解、あるいは朱陸の異同の弁証が、直ちに是非邪正という価値判断と緊密に絡み合せて捉えられていることである。「則ち其の孰れか是非、孰れか得孰れか失……」という件りなどは、朱陸に対する栗水の立場というのが、文字通り「あれか―これか」「朱子か―象山か」という鋭角的な形で選択を迫るもので、両学の習合折衷などという中間領域的な余地など些かたりとも許容しない底のものであることが窺われる。突き詰めて言うと、彼の『朱陸太極問答合編』は朱子学の真理性、象山の学の非真理性を弁証するために執筆せられたといっても過言ではない。

また、碩水が沢瀉宛の書簡で『朱陸太極問答合編』の立場が明の人陳清瀾（二四九七―一五六七）の『学部通弁』に依拠してその朱陸論を展開しているのを取り来たって、辛辣に批評している一事を指摘してもよい。なお、左に掲げる碩水の文を理解する準備として行論上、清瀾の『学部通弁』の性格について若干のことを指摘しておく必要がある。『学部通弁』総序の「天下學術より大なるは莫し。學術の患は蔽障より大なるは莫し。近世の学者の、儒仏混淆して朱陸弁莫き所以の者は、異説重ねて之が蔽障を為して、其の底裏是非の明白あきらかならざるを以てなり」という文は、同書の述作の意図を圧縮して表現している。清瀾の活動した時期は、王陽明直伝の弟子たちの講学活動による陽明学の宣布、その興隆期と重なっている。折りしも程篁墩の『道一編』の成立、続いてその示唆を得て成った王陽明の『朱子晚年定論』に象徴されるように、ことさらに朱子学を歪曲して陸王学に牽合しようとする風潮が高揚しつつあった。わけても右『道一編』は宋末から元末明初にかけて脈々と相承せられた朱陸折衷論の系譜の集大成としての地位を担っていた。それだけに、清瀾の努力というのは『道一編』において集中して表現せられている朱陸合一論的な立場を論難して、朱子学の本姿を闡明するところに傾注せられたといってもよい。ただ、その書はその執筆意図からも窺われるように、熾烈な闘異意識、是非邪正の弁別に急なるの余り、攻撃対象への理解が必ずしも徹底せず、議論のための議論に陥っている弊を免れなかった。例えば沢瀉の「東莞の学に志す、篤からずと為さず。而るに其の議論抑揚の際、俚言・野語・誣あやうる者、訐あやく者、雑出して顧みず。蓋し其の学訓詰に止どまて、其の心口舌の上に

存するか。豈に君子言を慎しむの旨ならんや」(『学部通弁彫題』)という批議などは、清瀾のそういう傾向を剔抉したものに他ならない。

並木氏朱陸太極問答合編一条に付、縷々御示轍并ニ御高見拜見、一々敬承仕候。其道之本源ニ就て論弁有之候ハ尤之事ニ奉存候得共、其主トシテ学部通弁ヲ尊信有之候ハ、今日ニ在テハ既ニ陳腐ニ属シ甚不面白。其眼目之不明之処も相見へ候へハ、本源上ニ於テモ愈徹底相成居候哉、無覺束奉存候。(『朱陸朱子学者書簡集』二三七頁、楠本碩水書簡、以下、朱子書と略記する)

碩水が指摘しているごとく、『朱陸太極問答合編』における陸学批判の視座がほとんど全面的に『学部通弁』に依拠していることは、「後叙」に至つてその裏を取つて組織的に展開せられていることが明らかに。果たして「後叙」を読む者は、栗水が『学部通弁』の文を引いてその忠実な祖述者として丹念にパラフレーズしているのを見出すであろう。栗水は「後叙」において朱子以後、陸学を異端——儒装した禅学としてラディカルに論難した資料の中、最も著名なものとして羅整庵の『困知記』、胡敬齋の『居業録』、そして『学部通弁』の三書に指を屈している。わけでも「中に就いて清瀾氏の書、考据覈実、剖析詳明、象山の遮蔽の節を抉開して、遁情有ること莫し」という言説は、彼の『学部通弁』に対する絶対的な信頼を語っている。(因みに沢瀉は碩水宛の書簡で、右三人の朱子学者の手に成る異学批判の書三篇を取り来たつて、異議なしとしないといつてその批判の視座に不満の意を隠そうとしない。とりわけ『学部通弁』(及び『求是編』(憑貞白撰))に対しては「胡言乱説、何ぞ取るに足らんや」(『朱王合編』四、復楠本吉甫)と、ほとんど問答無用底に一刀両断に付して、栗水の評価とは甚だ対蹠的である)。そして、この場合注意を要するのは、栗水のかくのごとき『学部通弁』に対する信頼の念が、彼の朱陸の弁証の視座を強く規定している事実でなければならない。

上來、碩水が『学部通弁』に依拠した栗水の朱陸の弁証を取り来たつて、「今日ニ在テハ既ニ陳腐ニ属シ甚不面白……」と批議していることについてはすでに指摘した。その文面は間接的な形において朱子学者碩水が『学部通弁』に対して強い不満を漏らしたことを示唆するものである。朱子学の徒にして既に然りとすれば、まして多少なりと陸

王学に同情を有する学者が同書に対して鋭い批判の矛先を向けるのは想像に難くない。沢瀉もまたそういう中の一人であった。沢瀉は栗水の編著書を彼の許にもたらした大橋路卿（訥庵の実子）の請を容れて「書朱陸太極問答合編後」を著したが、その中で清瀾の書を取り来たって、「通弁の一書に至っては、誣罔杜撰にして、忌憚する所無し。李穆堂通弁弁を著して一一之を駁せり。無知陳建殆ど完膚無し」（『沢瀉雜稿』中）と、口を極めて峻烈に批判している。また、彼は上の文に続けて清瀾の人となりについても「彼己氏（この三字読解不能）立心正しからず、著書も亦た権貴に逢迎するの意に在り」（同上）と評して、その為めにするところのある執筆意図について辛辣な批判を向けている。（なお、すぐ前でその文の一部に閑説したごとく、沢瀉にはその他『学部通弁』を直接主題に上せた『学部通弁彫題』なる專著が存する。この書は彼の二十五歳の少壮時に成ったものであるが、『学部通弁』の全体にわたって加えられた論評は、同書の難点を犀利に衝いていて彼の見識の高さを窺うに足る）。

このように、清瀾の『学部通弁』が碩水や沢瀉の指摘するごとく種々の難点を有する問題（プロブレマティク）の書であるとするならば、同書にその批判の視座を全面的に依拠している栗水の朱陸論というのは、結局根柢を欠いた非常に不安定なものになるのを避けられないのではないだろうか。それでは、講友たちの一擲、かかるラディカルな挑戦（既に指摘したごとく、碩水は『朱陸太極問答合編』を取り来たって、率直に「今日ニ在リテハ既ニ陳腐ニ属シ甚不面白」と言って、その論議の手法のマンネリズムを指摘した。また、沢瀉は上掲の文に続けて「豈に援きて以て証と為さんや」と言つて、その方法論的意図の脆弱性を衝いている）に対して、栗水はどのように応答するのであろうか。事態かくのごときであるから、その論調が論争的（ディレクティブ）なものになるのはその趨勢からいって避けられない。ともあれ、われわれは以上の叙述から「合編序」及び「後叙」の二文が、その書に単に形式的に間に合わせで附載せられたものとは凡そ異なつて、それ自体が一篇の資料としてそれぞれの位相において朱陸の弁証を行っているのを予想させるものであることを確認すれば足りる。

次に本論ともいふべき「朱陸太極問答」について述べるとしよう。右「問答」は『朱子文集』三十六から朱子の「答陸子美」書、「答陸子静」書をそれぞれ三書、また『陸象山全集』二から象山の「与朱元晦」書をやはり三書抽出し

ていて、都合九書簡でもって構成せられている。その場合、栗水が朱子並びに象山の膨大な書簡中から九書簡を抽出して、時系列に従い年代順に配列して一書と成したことは、それ自体彼自身の高度に目的意識的な態度に貫かれたもので、無雑作に選択がなされたものでないことが首肯せられるであろう。このことは、彼の抽出した書簡はわずかに九書に止どまるけれど、これらの書簡が濂溪の『太極図説』劈頭の「無極而太極」の五字をめぐって、朱子と陸子兄弟との間でその解釈をめぐって催起した論争の起伏を最もよく伝える中心的な資料に他ならないことに思いを致したならば、思い半ばに過ぎるものがある。そして、栗水が自らの編著書を『朱陸太極問答合編』と命名した所以も、右のごとき事情に由来しているといつてよい。ひとまず、われわれはここでは上來述べた「朱陸太極問答」の構成それ自体が雄弁に栗水の方法論的意図というものを語っていることを指摘すれば足りる。

もっとも、「朱陸太極問答」は朱子及び陸子兄弟の九書簡の単なる羅列に尽きるものでは固よりない。このことは『朱陸太極問答合編』に直接就いて見れば直ちに判然とすることであるが、例えば右問答の本文の上欄に九書簡全部にわたって端正な小文字で栗水のコメントが記されている一事は、このことを端的に語っている（以後、われわれは「合編序」の表現に倣って彼のコメントを「私説」と呼ぶこととする）。なお、これは私の単なる推測にすぎず、場合によっては奇矯な言辞を弄しているように思われるかも知れないが、その丹念な「私説」は、「合編序」や「後叙」とはひとまずその性格を異にしているのではないかと思う。『朱陸太極問答合編』を構成している三つの文は、いかにも栗水が書齋裡においてモノローグの形で自己の思索を結晶化させたものに相違ないが（もっとも、かく言ってもその文の原型が螟蛉塾における門人たちに対する講義・講論を介して構想せられた可能性を否定するものでは固よりない）、そんな中にあつて「私説」は些かその成立の由来を異にしているのではないだろうか。三つの文はともに朱陸の弁証という同じ一つの事態を主題としながら、その時間的様態においては判然と異なっている。すなわち、「私説」は朱子と陸子兄弟との無極太極論争の直中（象山側の資料によると、梭山の後を承けて「無極而太極」の五字をめぐって象山と朱子との間に論争の口火が切られたのは時に淳熙十四年（一一八七）、朱子五十八歳、象山四十九歳であつた）において、栗水自らその論争に介入してなされた当処即応の批評という概がある。事態かくのごときであるとすれば、

その時間的様態はひとまず「現在」として規定することが可能である。一方、他の二文は栗水が朱陸の論争の現場から身を引いて、明治十年代に立ち返って物した述作である。従って、その時間的様態においては未来的であるということが出来る。(淳熙年間に催起した朱陸の論争を「現在」と規定すると、明治十八年に成立した「合編序」及び「後叙」の時間的様態は当然未来性を帯びることになる)。

また、「私説」はいわゆる割注の変形、あるいはそのバリエーションのように見えるかも知れぬが、それとも本質的に異なっている。「私説」の時間的様態が現在のことに着目して強いて類似を求めるならば、芝居の「掛け声」に似ているかも知れない。「舞台上で現に演じられている芝居に向かって、現にそれを観ている観客が当処即席にやじや合の手を入れることによって、舞台上に演じられている出来事に直接介入する」(上田閑照氏著『禅仏教根源的人間』。因みに小論が栗水の「私説」を芝居の掛け声と捉える着想は、これを上田氏が同書の第三章「対話と禅問答」において、禅の著語や拈弄という独特の形式を芝居の野次に譬えていることから得ている)。その場合、観客の側から舞台上の役者に向かって発せられる掛け声の種類は、芝居の出来不出来に応じて時には野次であったり、あるいは罵倒の声であったり、またある時は激励であったり、賞讃であったり、感嘆の声であったり……と、当然区々であることを避けられない。そして果たせるかな、われわれが「私説」に直接即いたとき、かかる消息、その種々相をそこそこに見出すことであろう。このように「私説」が芝居の掛け声に比擬せられることから、それは栗水の能力・力量がその一処において即今現在に最も端的に問われる場所である。そして、すぐ上で「朱陸太極問答」の構成をめぐって指摘した栗水自身の高度に目的意識的な態度、あるいは方法論的意図というのは、「私説」を検討することを通して明らかにされるといわなければならない。それに止どまらないで、九書簡を抽出して一篇と成した「朱陸太極問答」が『朱陸太極問答合編』の本論として位置付けられる事実に徴するならば、それに緊密に対応する栗水の「私説」が同様に重要な地位を占めることは改めて喋喋を要しない。換言すれば、朱陸の無極太極論争に係る栗水の理解というのは、「朱陸太極問答」に附載する「私説」を直接検討することを通してその実相が明らかにされなければならないことを物語っている。

上采、『朱陸太極問答合編』を取り来たつて、その構成のアウトラインについて些か閑説したのであるが、同書に立ち入る準備として、ここで栗水の学問から観取し得る一の傾向について指摘しておくことは、彼の学問の性格を占う上において意味なしとしないであろう。試みに栗水の名著と目される述作を成立順にあげてみると、凡そ次のごとくである。なお、括弧内の数字はその書の成立年を表わす。すなわち、(1)『朱陸太極問答合編』(明治十八年五月)、(2)『増補周易私断』(明治三十年三月)、(3)『宋学源流質疑』(明治三十六年五月)。われわれが然く栗水の名著と考えられる述作を成立順に列挙して想到するのは——固よりそれは途中の論証を一切抜きにした結論の先取りを出ないものにすぎないけれど——、彼の関心の力点が主として太極・理・気……など、朱子学の存在論・形而上学的な象面に集注せられていること、これである。もつとも、栗水には朱子学の實踐論(あるいは人間学)の要諦をなしている「性」について主題的に論じた述作(「性論」)や、義と利とを即自的に(無媒介に)結合させて世俗に迎合する時潮に棹さして、両者の峻別を説いた『義利合一論弁解』などの著書が存するのに徴すると、彼が広義における実践論・倫理学の領域に無関心であったというのでは固よりない。これは儒学の徒としては蓋し当然である。であるから、栗水の関心が朱子学を構成する要素のうち、太極・理・気・性・命……など、存在論・倫理学の領域に跨った最も基礎的な理論的・実践的原理に集注せられているといった方が、事態としてはあるいは一層正確であるかも知れない。

このように、彼の学問における主たる関心が朱子学その他の領域(例えば古典注釈学、歴史学、あるいは礼学……など)においてではなく、存在論・形而上学的な象面に向けられていることは、右にその名をあげた栗水の名著に徴したならば、容易に首肯せられるであろう。行論上、以下にそれらの述作の性格・特徴についてその概略をざっとデッサンしてみるとしよう。もつとも、かく論ずるに至つて、あるいは人はわれわれが直接『朱陸太極問答合編』に就かないで、周辺の副次的な問題に向かうのを不審に思うかも知れない。であるから、些かこのことについて釈明

しなければなるまい。由来、栗水を知る者は稀である。小論が然く企図する所以の一斑は、栗水がどのような人物で、どういう志を抱いて幕末から明治・大正を生きたのか、またいかなる著述があつて何をなしたのか（あるいは何をなさなかつたのか）、われわれがほとんど具体的なイメージを持ち得ないという事情に由来している。なお、上來もその一斑については指摘したことでは些か重複を免れないけれど、今日、栗水の名前を聞いて（1）彼が幕末の思想界にその偉才を謳われた朱子学派の代表的なイデオログ大橋訥庵の高弟としてその衣鉢を継いだ学者であること——その成果は、直接には訥庵の未完の遺作『周易私断』を訂正増補してこれを続成した『増補周易私断』として結晶している——、（2）栗水が明治十八年に著した『朱陸太極問答合編』に対して、その講友の碩水及び沢瀉が応答して、三者の間で朱子学と陽明学の性格規定、あるいはその基本的範疇の定義をめぐって論争が繰り広げられたが、それは明治時代におけるわが国の宋明学のレビューを卜する試金石としての地位を占めていること、（3）あるいは弱冠以來、朱子学に従事して聖賢の真伝とまで篤く信じて忠実にその学を祖述してきた栗水が、多年『周易』に沈潜した結果、朱子学に対して大疑を抱き、齡七十を越えて『宋学源流質疑』を著して自己の学説に大幅な修正を加えて朱子学離れを演ずるに至つたこと……等々を知る者は、よほどの専家に限られるであろう。もつとも、叙上の三つはいずれも彼の思想に直接係る最も高度に自覚的で、かつ抽象的な領域に属する事柄だけに、あるいは事情已むを得ないかも知れぬ。それでは、次に彼の生の一層具体面に即する事柄を指摘してみたらどうであろう。（4）その師訥庵の生が優れて政治的であつたのとは対蹠的に、栗水は夙に官途に意を絶ち、山田に退去して茅屋を水竹の間に構え、終生簡素な生活に甘んじた。もう少し肉付けして述べると、彼は幕末から明治・大正にかけて北総香取郡古賀村御所台（現千葉県香取郡多古町）において螟蛉塾を主宰し、読書講学と郷党子弟の育英とに従事して、門下から幾多の人材を輩出したのだつた。因みにその姓名の一斑をあげると、寺島直（大審院判事）、鈴木隆、林泰輔（文学博士）、土屋秀立、川田鷹夫、大橋義三（訥庵の実子）、菊池三郎、松平良郎、五十嵐敬止（貴族院議員）、菅澤重雄（衆議院議員・貴族院議員）……等は、最も世に著れた人たちである。栗水その簡素な生は、門生塚本柳斎の表現を借りると凡そ次のようなものであつた。「先生世態變遷、人心推移の際に遭遇して、超然として肥遯す。僻陬の地・蕭条の浜に在りて、

優遊として道を楽しむ。毀譽も移す能わず、得喪も奪う能わず。是くの如き者前後六十年なり」(『並木栗水先生伝』)。栗水の史的地位は明治という新しい時代を生きながら、例外者Ⅱ前時代の思想や学問の保持者として、近代に在りながら前近代を標榜するという背理的なものであった。柳齋のその文面は、一見すると栗水の明治以後の生が比較的閑雅な穏やかなものとして描かれているので、その背後に存するドラスティックな現実をわれわれの目から覆ってしまふ。だが事実はそういうことである。そして、ひとまず(4)に限って言っても、然くわずか数百字の表現を取って形容し得るところの栗水の生が指し示している原本の事実とはどのようなものであるのか、本当には分からない時代をわれわれは生きているのではないだろうか。その意味においては、E・ハーバート・ノーマンの著名な著書の表題を借りていえば、栗水はいかにも「忘れられた思想家」である。しかも、上乗の簡単な叙述が示唆しているごとく、それは二乗化せられた意味においてそういうことができるのである。因みに栗水が没したのは大正三年七月である。このように時代はなお近く、彼の著作原稿、親筆の書簡類、その他……等々多数残っている。そして、それらの資料は並木栗水とは何者であるか(何者であったか)を油然と語り出していることを、私は信じたい。この場合問題なのは、われわれが資料を介してその声(声といったが固よりそれは比喩的な表現であって、あるいは並木栗水の当体といつてもよい)を聴き取ることができるかということだ。無論このように言ったからといって、私がそうすることができたと主張しようとしているのではない。ただ、私は栗水の資料に沈潜してその奥から呼びかけてくるある声を聴きたいと庶幾しているにすぎない。このように、小論はその意図のみ壮大しかも実質の伴わぬ、そういう貧しい試みに他ならない。

(1) 『朱陸太極問答合編』については、その究明が小論の直接の主題であること、また既にその構成をめぐって若干のことどもについて指摘したのでここでは繰り返さない。(2) 『増補周易私断』(十一卷)は栗水の述作中において最も大部なものである。しかし、その書は単に浩瀚な著述というに止どまらない。高弟の林泰輔博士はその「宋学源流質疑序」において、『増補周易私断』が栗水畢生の精力を傾注して成った述作で、その学術の全体像を知るには同書を繙読することが不可欠であることを指摘している。すなわち、

今竊かに斯の編（『宋学源流質疑』を指す）を読み、程朱と濂溪と、其の説同じからざるを知る。而して先生は専ら濂溪を主とす。剖析精微此に至り、始めて以て宋学源流の得失を論ずべし。然りと雖も是れ先生に在りては特だ吉光片羽のみ。若し先生の学術の大全を知らんと欲すれば、則ち増補周易私断の一書在り。此れ其の畢生精力の注する所、尤も以て読まざるべからざるなり。

私は曩に小論の劈頭において『宋学源流質疑』が晩年の栗水の学問の到達点を示しているとともに、同書において彼の朱子学離れが最も組織的に論理化せられていることを指摘した（注一）参照）。しかるに、右の林博士の言説は『宋学源流質疑』が宋学の真機に触れたすぐれた述作であることを首肯しつつも、同書が飽くまで栗水問学の片鱗を窺うに足るに止どまってその全豹を尽くしたものでないことを主張している。その指摘は栗水の学問の規模を画定しようとする者にとっては甚だ示唆するところが多い。

もつとも、栗水畢生の精力を傾注したところの『増補周易私断』の成立の由来は、彼のその他の述作とは些か事情を異にしている。その書は栗水の師——楠本端山をして「只今都下二而道德性命の学第一者大橋順蔵二而可有之」（『朱子書』五九頁）と言わしめた、幕末の思想界にその偉才を謳われた代表的な朱子学者——の大橋訥庵の未完の遺作『周易私断』を訂正増補してこれを続成した労作である。栗水は実に訥庵朱子学を継いだ学者であった。このことは彼と同時代の錚々たる学者たちが然く目していたに止どまらないで、何より栗水自身がそのことを強く自任していた節がある。かかる消息は例えば碩水に宛てた書簡中の「先師精神命脈ノ存スル所ハ著書ニアリ。僕因リテ先師ノ著書ヲ相続シテ、聊以テ教育ノ深恩ニ報セントス。是レ区々ノ志也」（『栗水問答』、写本）という言説に圧縮して表明せられている。右の文面は一見すると、直接には訥庵の未完の遺作『周易私断』の続成を指しているように読める。そして、それは結果としてはいかにもその通りであろう。しかし、それは飽くまで結果としてそうであったというにすぎず、そのように一義的に限定して捉える必要はないと思う。むしろ、その言説はもつと広く訥庵朱子学の精神を著述を介して継承しようとする彼の強い意気込みを告白したものと解することができるのではないだろうか。

訥庵が夙に『周易』に対し並々ならぬ関心を有して造詣の深かったことは、例えば弘化三年（一八四六）冬、『御

纂周易術義』(十卷)に校点を施し、思誠塾蔵版として上梓した一事に徴しても明らかであろう。時に訥庵三十歳。なお、ひとまず直接には易書の刊行という一事を介して垣間見ることのできる彼の『周易』に対する関心が、いかなる思想的伝統をその後景に負っているかということについては、後に触れる機会がある。栗水の「増補周易私断序」及びその他の叙述によると、訥庵の易説の講義は既に彼の在塾中に開講されていて(因みに栗水の在塾期間は嘉永三年(一八五〇)春から安政二年(一八五五)に至る足掛け七年間)、その時の講義が原型になって後に『周易私断』の稿本が作られたらしい。もつとも、訥庵の講義は『周易』の全体にわたる周到なものではなく、「无妄」の卦(『周易』上経)に止どまる不完全なものであった。巻数でいえば凡て四巻。栗水によれば、巻首一巻と本経二巻は彼が在塾中に写録したもの、他の一巻は訥庵の没後に養嗣子大橋陶庵が写録したものという。栗水の「其の体例未だ斉整ならず、或いは国字もて之を記すこと有る者は、未定の稿本を以てなり。嗚呼、先師学博く識明らか、將に此の書を作爲して以て後学を啓発せんとするに、不幸にして天寿を假さず、其の功纒かに茲に止どまる。遺憾勝て言うべけんや」(『増補周易私断序』)という文面は、訥庵の『周易私断』が未完の書に終わった経緯を簡潔な筆致で伝えていて情理を尽くしている。因みにその文面は、その要因が係つて幕末開国期の「疾風勁草之時」(訥庵の語)に際会して政治的傾斜を加速させた訥庵を突然襲つた非業の死にあることを語っている。事情かくのごときであるから、栗水がその後を継いで続成したのは上経「大畜」の卦より以下、下経「未済」に至る三巻、及び十翼(「象伝」上下、「象伝」上下、「繫辞伝」上下、「文言伝」、「説卦伝」、「序卦伝」、「雜卦伝」)の四巻。訥庵の四巻と合わせて凡て十一巻。ただし、大正十一年九月に上梓せられた『増補周易私断』は巻首及び上経・下経の七巻(六冊)に止どまって、十翼の四巻を欠いている。因みに同書の巻頭を飾る「増補周易私断序」は碩水の作で、その墨蹟のままを印刷に付している。

訥庵及びそのスクールにおける『周易私断』述作の意図というのは、栗水がその序文劈頭に引く訥庵の文から観取することができるであろう。

四書及び其の他の経義は、固より当に程朱を以て断と爲すべし。惟だ易は程子は義理を主とし、朱子は占卜を主として、各おのの偏に偏れり。且つ其の書も亦た闕略有れば、則ち専ら二子を遵守するを得ず。而して後來の諸儒発

明極めて多し。学者宜しく之を参酌すべし。是れ私断の著有る所以なり。(同上)

右の文に徴すると、訥庵のスクールにおいては朱子の古典注釈学のうち、四書集注やその他の注釈書(例えば『詩集伝』など)と、『周易』のそれ(朱子の『周易』に関する述作には『周易本義』(四卷)、他に同書の象数的側面を明らかにした『易学啓蒙』(四卷)が存する)とでは、些かその評価に抑揚があつて史的位置付けが異なつていた。

儒教の經典の首である『周易』に対する関心は宋代に至つて一層の高まりを見せたが、その中に盛り込まれている深奥な哲理は、宋人の世界観・人生観から処世術に至るまで広範な影響を与えた。そして事実、数多くの特色ある思想家たちがそれぞれの立場から、独自のすぐれた述作を物したのである。その一斑を示すと、曰く『皇極経世書』(邵康節)、曰く『易童子問』(歐陽脩)、曰く『易説』(司馬光)、曰く『横渠易説』(張横渠)、曰く『蘇氏易伝』(蘇東坡)、曰く『漢上易伝』(朱震)、曰く『誠齋易伝』(楊万里)、曰く『南軒易説』(張南軒)、曰く『易説』(呂伯恭)、また曰く『楊氏易伝』(楊慈湖)、その他……等々。その中でも義理の立場から『周易』を解釈した伊川の『易伝』(四卷)、占筮という『周易』の原初の姿に立ち戻つて解釈した朱子の『周易本義』などは、そういう成果の中の出色なものであった。因みに宋人が然く『周易』に対して並々ならぬ関心を示した動機は那辺に存しているのだろうか。その動機の一斑(固より有力な)が、この書が新しい形而上学を開示する可能性を伏在させているのを彼等が端的に洞観し得たところに存していることは疑えない。すぐ上で指摘した訥庵の『周易』に対する関心も、その胚胎するところを尋ねると遙かにそういう思想的文脈にまで遡つて理解することができるであらう。

なお、ここで注意すべきは彼が『易伝』及び『周易本義』の二者がともに義理か卜筮かの一方に一義的に偏向している、『周易』の全体を尽くしたのではないといつて、その発展の余地を将来に保留していることである。その構えが、四書集注や他の注釈書を間然する所のない絶対的な所依として奉じている態度と比べて、いかに大きな懸隔が存しているかははや明らかである。それだけに、上来の程朱の『周易』の注釈書はいまだ不完全なところを留める述作で全面的には所依として遵奉することができないという告白は、非常に率直を極めているといわなければならぬ。このように訥庵の『易伝』及び『周易本義』に対するかかる断案、飽くまで自己の主体性を確保して程朱の説に

曲従せず、是を是とし非を非とする態度というのは、朱子学の時代を生きて自ら誠実な朱子学の徒であることを自任している者にとっては甚だ思い切った、それだけに心理的にも勇氣のいる例外的な発言ではなかっただろうか。因みに後来の栗水の朱子学に対する大疑、続いて起こった朱子学離れ（もつとも、かく言つても固よりそれは朱子学の矩矱を完全に超脱して別体の学へと転入する底のものとはいいい難い）というのは、訥庵及びそのスクールにおける程朱の『周易』の注釈書に対するかかる抑揚のある態度に遠く淵源していると考えられる。

なお、上來述べ来たつた消息について、栗水の次の二文は一層具体的で、右の訥庵の文をパラフレーズした趣がある。殊に後文は委曲を尽くしてその感が深い。事情かくのごときであるから、些か長文にわたるけれど煩を厭わず引用することとしよう。

僕四書・小・近ニ於テハ朱子ヲ墨守致シ候。最モ小・近ノ書ハ朱子御纂定ニテ、実ニ三代以後ノ經書ト申スベシ。尊奉ノ外他ナシ。（『朱子書』四二六頁）

僕易ニ於テハ專ラ本義ヲ墨守セズ。程伝ト併セテ之ヲ讀ム。矢張折中ノ趣意也。其説長ケレバ敢テ贅セズ。但シ僕朱子ニ背キ候ヤノ御疑念ニ付、一通リ分疏セザルヲ得ズ。僕ノ朱子ヲ尊奉スル事、猶朱子ノ程子ニ於ケルガ如シ。朱子ハ平生程子ヲ尊奉スレトモ、易ニ於テハ自著ノ書ヲ本義ト題ス。是レ程伝ヲ以テ本義ニ非ズトスル也。特ニ程伝ノミナラズ。孔子十翼モ孔子ノ易ニシテ、義文周公ノ本義ニ非ズト為ス説、語類ニ見ヘタリ。僕謂、孔子之易即義文周之易、程子之易即孔子之易也ト。程子ハ義理ヲ主トシ、朱子ハト筮ヲ主トス。孔子大伝中ニハ、義理モ象數モト筮モ悉皆有之。故ニ程伝・本義ハ主トスル所異ナリト雖トモ、惣テ孔子ノ範圍中ニ在リ。故ニ僕ハ双方ヲ併セ讀ム也。僕豈ニ朱子ニ背カンヤ。私断ノ書ハ伝義ヲ載セズ。諸儒ノ説ノミヲ聚載ス。伝義ヲ讀ムノ参考ニ供スル也。按スルニ朱子本義ハ未定ノ書也。後來欲有所著作而未果ト云フ。本義ノ書、簡潔ニシテ悉ク其義ヲ尽シ難シ。故ニ其門人李環溪・胡炳文等又發明少ナカラズ。後來諸儒發明亦多シ。是レ豈ニ聚載セザルベケンヤ。僕朱子ノ忠臣タルヲ欲ス。佞臣タルヲ欲セザル也。（同上、四一九頁）

前文において栗水は四書集注、更には『小学』や『近思録』などの編纂書類が間然する所がなく、準經書（原文は「実

二三代以後ノ經書ト申スベシ」に作る）として尊奉の他ないことを率直に告白している。彼が朱子の右の編著書を絶對的な真理としてドグマ的に信じて、それを所依としているごとき態度は、これを他の朱子後学と比較しても大同小異であつて、さして異とするには足らぬであらう。なお、栗水が間然する所がないとしてその名をあげている四書集注が、朱子の数多くの述作中において最高峰に位置付けられることについては、改めて喋喋を要すまい。かかる消息は例えば明初の代表的な朱子学者薛敬軒の次の文に徴しても、その一斑を間接的に窺うことができるであらう。

四書集註・章句・或問は、皆な朱子群賢の言を萃め、議して折衷するに義理の權衡を以てす。至高至大、至精至密、先聖賢の心を發揮して、殆ど余蘊無し。学者は但だ当に朱子の精思熟読、序に循ひ漸進するの法に因り、潛心体認して之を力行すれば、自ら得る所有らん。（『読書録』一）

文中の「精思熟読、循序漸進」という表現は、朱子の読書法の要訣を表す術語であつた。なお、これは単なる推測にすぎないけれど、敬軒が学人に朱子の読書法の精神に違つて四書集注・章句・或問に心を潜めて体認力行することを勧めている件りなどは、彼がかつて何を手掛かりにして朱子学を接受し理解しようと努めたかという、自らの体験の跡を語つた概がある。そして、このことは四書集注の成立するプロセスが、朱子自身の思想が完成するまでのプロセスとパレルルであることに思いを致したならば、敬軒のそれがいかにすぐれた朱子学理解であるかが窺われるであらう。ともあれ、彼の「至高至大、至精至密、先聖賢の心を發揮して、殆ど余蘊無し」という表現が、朱子の述作中において四書集注の占める地位が那辺にあるかを証していることを確認すれば足りる。その他、朱子学の重要な資料として『小学』及び『近思録』などの書名をあげていることも、栗水の朱子学に対する理解の程、勘所の確かさというものを窺うに足るものがある。（また、彼が朱子問学の精神を知る資料として、右二著の他にかつてわが国の教学にまで多大な影響を与えた「白鹿洞書院揭示」をあげていることも、このことを証している）。

しかるに、訥庵及び栗水のスクールにおいては、『周易』一経に限つていへばその他の經書とは異なつて、程朱の注釈書に必ずしも絶對的な価値を与えず、いまだ發展の余地が残されているとして、些か抑揚のある態度を取つている。このことについては既に指摘した。後文において注意すべきは、栗水が訥庵及び栗水のスクールにおける『周易』

に対する抑揚のある態度を朱子の程子に対する態度に比擬して、そのモデルを朱子その人に見出して弁明していることである。程子（殊に伊川）の学問と朱子のそれとがその根柢において連続するところから、両者の思想的血脈の同質性が指摘されて「程朱学」の称があることは既に周知のことに属する。程子は朱子の学の直接の源であり、世界観における理と気分離、天理と人欲の峻別、学問工夫における居敬と格物致知の双提……等、程子の学説は朱子によって継承されて、朱子学を貫いてその基本的な論理・枠組を構成している。このように、後者の前者に対する関係は実にその全体にわたる根本的な基調をなしている。もともと、朱子は自己の思想体系を構築する過程において程子の説に曲従せず、已むを得ず従い得ない場合には率直にそのことを告白している。栗水はそういう事態が大規模に遂行された一つのモデルケースとして、朱子が伊川の『易伝』を『周易』の本義を闡明したものに非ずと断じて、改めて『周易本義』を著した一事をあげている。栗水が指摘しているごとく、『易伝』が間然する所のない述作であったならば、『周易本義』を著す必要などそもそも認めなかつたはずである。その場合、朱子の『易伝』に対する最も大なる不満は、それが一義的に義理の象面から『周易』を解釈するに止どまって、その書が製作せられねばならなかつた根本の動機、その原初の祖型、あるいはその機能面についての理解が乏しいとするところにあつた。なお、伊川『易伝』の成立過程について、楠本正継博士の次の文は簡潔な筆致でその消息を語っていて参照するに足る。

其著、易伝は潜心甚だ久しくして容易に一字を下さず、七十にしてなお推敲を怠らなかつた。それはどこまでも字力の少進を希ひ、老耄を氣附くのを待つて始めて門人に伝へ度い考であつた為といふ。事実、此書が門人張繹に伝へられたのは死に垂んとするの日であつた。しかも、かゝる苦心の結果、伊川は「たゞ七分を説き得た」として、更に後人が自ら体究すべきを願つた。（続二程子論―伊川の部―）

このように、『易伝』は伊川畢生の精力を傾注して成つた彫心鍊骨底の書であつた。であるから、ひとまずその書を『周易』の解釈から離れて一篇の哲学的文章・思想作品として独立して見たとき、それが義理を説いてはその象面において比類のない透徹性を示しているとして、朱子の賞讃（『朱子語類』六十七参照）を博するに至つたのは必ずしも不思議なことではない。（朱子が『近思録』を編纂するに当たつて、『易伝』から多くの資料を採録しているのはかかる

消息を物語っている)。朱子の『易伝』に対する不満というのは、一言もってこれを覆えば、伊川が現在から思弁的であり、具体的であると思惟する一つの立場を『周易』に投入し、外からその書に疎遠なもの押し付けているところにあつたと考えられる。『周易本義』はそういう反省の上になつて、「朱子が易の文献批判を行ない、卜筮としての經と義理としての伝を分離し、易を原初の姿にもど」(三浦國雄氏「易」)そうとする企図の実現した書であつた。「易は卜筮の書なり」という言説は、朱子が反復して倦むところのなかつた命題である。(なお、『周易』を卜筮の書なりと定義する朱子の立場、その『周易』観については、小論の直接的な課題ではないので立ち入らない。上掲の三浦氏の「易説」はそういう象面を主題的に論じていることを付記するに止どめる)。

栗水の「孔子大伝中ニハ、義理モ象數モト筮モ悉皆有之」という表現は、『周易』を一義的に義理の書として解釈する伊川の立場も、同様に卜筮の書として理解する朱子の立場も、ともに一辺に偏向したもので『周易』の全体を尽くしたのではないという論理を導き出す一の根柢をなしている。また、次の言説も同じ基調に立つものであるが、それがカバーする範域は一層拡大している。

且朱子專ラト筮ノ書ト成サントス。是亦然ラズ。聖人豈惟ト筮ニ供スル為ニ此大典ヲ製作センヤ。抑易ハ天人性命ノ理ヨリ、誠正修齊治平ノ道粲然備具、実ニ五經ノ首也。故ニ子思孟子ノ性命ヲ説クモ、皆此書ニ原ス。宋朝ニ至リ周程張邵ノ絶学ヲ統カル、モ亦此書ニ本ケリ。朱子何ノ故ニ只ト筮ノ書ト成ントスルヤ。此愚ノ解セサル所也。
(『栗水問答』)

かくして長途にわたる『周易』に対する沈潜の結果、碩水を驚愕せしめた(沢瀉もまたその一人であつた)「朱子本義ハ未定ノ書也……」という破天荒(?)な断案が栗水から発せられるに至るのは、既に訥庵↓栗水のスクールにおける『周易』に対する史的位置付けの延長上に予料せられていた事態であつた。なお、詳細な考証は省いて結論だけを述べると、栗水の『周易本義』を未定の書なりとする断案(後述することく、碩水はその説を「千古の創見」と評して些か揶揄している気味があるが、栗水は自己の創見に係るものではなくて古人の説だと抗弁している)は概ね妥当なように思える。同書の成立は朱子六十一歳の頃であるが、その出来栄えに不満だった彼はその後改訂の労を怠

らなかつた。行論上、以下にすぐ上で指摘した栗水の断案に対する碩水のコメントを示すでしょう。

来教云、朱子ノ本義ハ未定ノ書也。是レハ千古ノ御創見ト可申、扱々驚人申候。四書集注ニモ前後相違ノ処アリ、引証間違ノ処アリ。其他偶然ノ誤モ不少。是亦未定書ト申候テ可ナランヤ。(『朱子書』、四二三頁)

碩水の文は続けて「後來欲有所撰著而未果」という文を取り来たつて、栗水が『周易本義』を未定の書と断ずるに際して論拠としたと覚しき『朱子語類』の資料二つをあげて反問しているのであるが、ここでは立ち入ることができない。右の碩水の言説には『周易本義』が未定の書であるか否かという純然たる学術上、書誌学上における考証の正否という問題には尽くされない、それ以上の意味が暗々裏に含蓄せられていとせねばならぬ。ここで碩水が問題にしている事態というのは、勝義には朱子の述作について自己の意見を尺度にして取捨するところのある栗水の態度(であるから、碩水は『周易私断』が訥庵の中年未定の述作であることを信じて、晩年には彼はそういう心事を放擲して「純然タル朱子学」に帰したと主張している)、あるいはそういう心術の中に冥々の裡に伏在している一の傾向についてである。そして、かかる点において碩水の立脚点というのは栗水のそれとはほとんど対蹠的であつた。彼の次の文はそういう消息を語っている。

敢テ其同ヲ求ルニ非ス。只朱子ニ帰セン事ヲ欲スルノミ。朱子学ノト申候テモ純然タル朱子学ハ絶テ無之候間、御互ニ朱子如シ差謬アラバ、吾同誤ヲ辞セザルノ心ニテ篤信仕度希望ニ堪ヘズ候(同上、一五八頁)

その文面にはほとんど山崎闇斎を髣髴させるものがある。碩水はやはり崎門学派の系譜に列なる学者であつた。しかし、この問題に立ち入ることはできない。後文末尾の「僕朱子ノ忠臣タルヲ欲ス。佞臣タルヲ欲セザル也」という言説は、栗水が朱子を信奉しながら、朱説に対して敢えて曲従せず、是を是とし非を非とする底の姿勢をどこまでも堅持しようとする訥庵↓栗水スタイルの立場を命題綱要として掲げた概がある。この場合、暗に「(朱子の)佞臣」が、「朱子如シ差謬アラバ、吾同誤ヲ辞セザルノ心ニテ篤信」と断然と喝破した碩水の立場を指しているのは明らかである。 (なお、私はかつて「幕末維新における新朱王学の展開(Ⅷ)——並木栗水及び楠本碩水・東沢瀉の史的地位——」なる小論において、「朱子之功臣」・「朱子之忠臣」という二の術語を手掛かりにして、碩水と栗水の両者の立

場を朱子と自己との人格的距離をめぐる問題という象面から主題的に論じたことがある。そして、栗水の次の文は右の「朱子之忠臣」という命題を丹念にバラフレーズした趣がある。わけでも、その文面は直接『増補周易私断』述作の意図に触れていて、訥庵→栗水における『周易』の史的位置付けの究明を目下の課題としているわれわれにとつては、ひとまずその結論としての地歩を担っている。

……但其信ズル処ヲ信ジ、疑フ処ヲ疑ヒ、一切ニ曲從セズ。此レ忠臣タル所以也。「陽尊朱子而陰執戈」ノ如キハ、叛逆ノ臣ニシテ忠臣ノ所為ニ非ズ。「以区々所見、容疑於大賢君子之書、無忌憚之甚」ノ咎ハ、僕固ヨリ免レザルヲ知ル。然レトモ疑而敢テ匿サズ。之ヲ書ニ筆シテ以テ後ノ朱子タル人ニ質サント欲ス。是レ僕述作之主意也。(同上、四二六頁)

因みに鉤括弧で囲んだ二つの表現はともに碩水の言説である。その文面に徴しても、彼が栗水の心術の中に冥々裡に伏在している傾向に深い懸念を示して剔抉しようとしたものが那邊に存しているか、その一斑を窺うことができるであろう。

〔注〕

(1) この場合、「前期」といつてもこの語は直ちに前半を意味しているのではない。人間の生涯を、わけでも思想家の生をある特定の起伏によつて画するということは、常に作業仮設的な意味を免れ難く、一義的にそれを固定して捉えることはできない。後述のごとく、『宋学源流質疑』は栗水の学問の到達点を示しているとともに、同書において彼の朱子学離れは最も組織的に論理化せられているといつてよい。試みに栗水の生涯を思想的起伏によつてざつとデッサンしてみると、同書の成立した明治三十六年を画期として(栗水時に七十五歳)、ひとまずそれ以前を前期(朱子学時代)、それ以後を後期(朱子学修正時代)として措定することが可能である。(なお、栗水の誕生から訥庵の思誠塾に入門する以前の二十歳までは、朱子学以前ともいへき前史に相当するが、この時期を加えると彼の生涯は凡そ三期に区分されるであろう)。そして、栗水の生において特徴的なことは、彼の朱子学時代に当たる前期の生が実に七十五年と、老年期にまで及んでいることである。このことは、彼の朱子学に

対する「大疑」が晩年に惹起したことの必然的な結果である。その場合、栗水畢生の精力を傾注したところの『増補周易私断』は明治三十年三月に成ったが、十数年にわたった同書の製作過程は、彼の朱子学離れを漸次醸成し準備した過渡期として位置付けられる。

(2) 「大疑」といった場合、われわれは反射的に太宰春台をして「夫れ損軒（益軒の致仕以前の号）宋儒の徒を以て、而も能く宋儒を疑う。誠に奇士なり」（『読大疑録』）と言わしめた貝原益軒の『大疑録』を想起するであろう。（もつとも、春台はその文に続けて、益軒が朱子の教説に疑問を抱くに止どまって排斥に至らず、その論弁するところも宋儒の羈絆を超脱するものではないといつて、その不徹底性を指摘しているのであるが、ここではそのことには触れない）。そして事実、林泰輔博士は栗水が朱子学の徒でありながら、しかも朱子の理気説を疑い、『宋学源流質疑』を著してその思索の跡を組織的に論理化したことを、益軒の『大疑録』に比擬している。

栗水並木先生、業を訥庵大橋氏に受け、程朱の学を崇奉す。訥庵嘗て周易私断を著す。未だ脱稿せずして歿す。先生其の志を継ぎ、増補攷定して、釐めて十八卷（十一卷の誤り）と為し、大いに発明する所有り。而して潜心玩索の余、一旦程朱の理気の説に疑う有り。頃ろ又た宋学源流質疑三卷を著し、朱子の太極図説、通書の二解と、易の大伝及び周濂溪の本旨と合わざるを論じ、弁析痛快、余力を遺さず。昔し貝原益軒晩に大疑録を著す。訥庵始め姚江の学を奉じ、後ち程朱に帰す。蓋し其の学愈いよ博ければ、則ち其の疑念愈いよ多く、其の識愈いよ進めば、則ち其の説愈いよ変ず。（『宋学源流質疑序』）小論が栗水の学の変遷について「大疑」という術語を使用しているのは、右の文中の語を借りたものである。また、林博士が栗水の学の転回を取り来たつて、彼の師の訥庵が佐藤一斎の陽明学の羈絆を脱して朱子学へと転回したのに比擬しているのは、訥庵・栗水一系の思想の傾向を知る上で大変興味深い。なお、益軒及び訥庵の学の傾向を論じ来たつて、末尾の「蓋し其の学愈いよ博ければ、則ち其の疑念愈いよ多く……」という結論の文、あるいはその結着の付け方というのは、一見何ら異とするに足りぬ陳腐な表現で、博士が無雑作に形容したものと思うかも知れない。しかし、それはそうではない。実は学問におけるかかる基調意識こそ、訥庵から栗水（そして、恐らく栗水から林博士）へと相承せられたところの、訥庵→栗水スクールを貫いている一の鉄案であった。